

共通語と村山方言における

発話機能を意識した発話の韻律的特徴*

高村 めぐみ

Prosodic Features of Utterances when Paying Attention to the Function of Murayama Dialect

Megumi TAKAMURA

要旨：本研究の目的は、非東京方言母方言話者（無アクセント）の日本語教師が、音声指導をする際に一助となる指標を提案することである。発話機能に相応しい村山方言、共通語 10 種類の発話を資料に、イントネーションの共通点、相違点を分析した結果、村山方言は共通語と比べ、(1) 一拍あたりの持続時間長が長い、(2) F_0 が低く変動幅が狭い、(3) 音圧が大きく変動幅が狭い、という特徴があった。これは発話機能別に分析しても同じであった。しかし、話者の個人的特徴を排除し、発話機能別に再度分析した結果、《挨拶》、《声掛け》、《協力求め》の 3 種類は、方言に関わらず韻律的特徴に共通点があったが、《依頼》《詫び》《許可求め》《祝い》《賞賛》の 5 種類は、方言による相違があることが分かった。発話機能を意識した会話を指導する際には、これらの共通点、相違点に留意して指導をすることを提案したい。

キーワード：村山方言 共通語 発話機能 韻律的特徴 相応しさ

1. はじめに

ある特定の意図や感情を伝えることば・表現には、何らかの発話機能¹が伴う。話し手が発したことば・表現に、どのような発話機能があるか聞き手が判断するとき、判断材料の一つとして韻律が使われる。そのため、話し手は特定の意図や感情に相応しい韻律で話し、聞き手が正しく発話機能を解釈するよう発話する。この発話機能に相

¹ 発話機能とは、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したものを指す用語」（山岡 2006：2）である。例えば、「すみません」ということばは、相手にありがたいという意図を伝えるために発話し、相手にもその意図が伝わった場合は《感謝》の機能を持ち、申し訳ないという意図を伝えるために発話し、相手にもその意図が伝わった場合は《謝罪》の機能を持つことになる。なお、「日本語学における発話機能は、国研（1960）における「表現意図」が日本語教育における機能シラバスの観点からの教材文の特徴を記述するために用いられ、その後国研（1987）がハリデーの「発話機能」を会話分析に応用して用いたものが先の「表現意図」によって代わって多用されている」（山岡 2006：14）。

応しい韻律は、言語を問わない普遍的特徴ではなく、言語ごとに異なる個別的特徴である（エリクソン・昇地 2010、高村 2018）。

発話機能と韻律の関係を考えると、ことば・表現が違っていても、ある特定の発話機能に相応しいと評価される音声の韻律には、共通点がある。高村（2020）は、ある特定の発話機能を表すことば・表現は複数あるが、どれを選んで発話をしていても、韻律的特徴には共通点があることを明らかにし、「機能別・韻律の指標」を作成している。この指標では、13 種類の発話機能（1.《挨拶》²（目上に対して）、2.《食事の挨拶》、3.《驚き》、4.《許可求め》、5.《お悔み》、6.《同情》、7.《指示》、8.《申し出》、9.《呼びかけ》、10.《感謝》、11.《断り》（行事などへの参加）、12.《謝罪》（目上に対して）、13.《謝罪》（友達に対して）の韻律的特徴を示している（表 1）。

表 1 13 種類の発話機能の韻律的特徴（聴覚印象）

発話機能	聴覚印象
1.挨拶（目上）	1文字ずつ、短く速めに話す。
2.食事の挨拶	全体的に大きい声で話す。
3.驚き	非常に高い声を使い、声の高さに激しい浮き沈みがある。
4.許可求め	低い声を使って話す。
5.お悔み	高い声を使わない。全体的に小さい。非常に小さい声～やや小さめの声の間で大小変化はある。
6.同情	全体的に低めで、声の高さの浮き沈みはない。全体的に小さい声で話す。
7.指示	全体的に大きい声で話す。
8.申し出	非常に低い声を使って話す。
9.呼びかけ	全体的に高くて大きい声で話す。また非常に高い声、大きい声を使う。
10.感謝	1文字ずつ、短く速めに話す。
11.断り（行事）	声の高さに浮き沈みはなく平坦に話す。
12.謝罪（目上）	1文字ずつ短く、早めに話す。高い声を使わず、声の高さの浮き沈みはなく、平坦に話す。声の大きさも一定で話す。
13.謝罪（友達）	低い声を使わず、声の高さの浮き沈みはなく、平坦に話す。小さい声を使わず、一定の大きさで話す。

高村（2020：33）より一部改変。

この指標は、東京方言をもとに作られた共通語を資料としているが、共通語以外の方言ではどうだろうか。日本語には多くの方言があり、アクセントについては多様な型がある。日本語のアクセントとイントネーションの関係は、イントネーションがアクセントの型を崩すことはない（天沼他 1978）という説もあるが、異なる説もある。定延（2013）は、母親が娘のエミを冗談でこわがらせるという場面の「エミのお手々食べちゃうぞー」という発話を例にあげ、この発話のピッチが 90Hz 前後から 110Hz 前後まで 2 秒ほどかけてなだらかに上昇しており、「エミ」や「食べちゃう」などの語アクセントの反映は見てとれないと述べている。これは、冗談で子供を喜ばせる場面

² 山岡（2006：2）では、「例えば、上司が部下に、（イ）「当分地方で休養しないか」と言ったとする。表現そのものは強制的ではないが、表現する以前の間人関係において、上司は部下の行動を規制する権限を持っているため、部下はこの発話を通常、地方への転勤命令であると受け止める。すなわち、この発話は《命令》の機能を持つとすることができる。《命令》の機能は、「聴者に対する行為遂行の強要」のように定義することができる。このように発話機能の範疇を表示する際、わかりやすさのために、《》で表示する。」と書いている。高村（2020）では、機能の範疇を表示する際「」を使っているが、本稿では山岡に倣い《》を使用する。

ではアクセントが崩壊するという例である。つまり、イントネーションがアクセントを凌駕する場合、アクセントとは無関係なところで話し手の意図や感情が聞き手に伝わる可能性がある。これは、単に文を読み上げた発話よりも、特定の意図や感情を伝えようとする発話でのほうが、より顕著であると推測する。

イントネーションがアクセントを凌駕する現象を複数の方言間で考えると、例えば「友人に軽く謝罪」をするという場面において、東京では「ごめん」、関西では「すまん」、山形では「われっけ」ということば・表現を使う。読み上げた発話は、地域方言のアクセントの型が保たれている。だが、「相手に申し訳なく思っている」、「相手に謝りたい」という意図で話した発話、つまり《謝罪》の機能を持つ場合、どの方言であろうと決して「高く抑揚のある嬉しそうな声」では発話せず³、「申し訳なさそう」なイントネーションで発話するのが適当である。

さて、このようなアクセント、イントネーションなどの韻律と方言の関係について、日本語教育の現場ではどのように考えているのだろうか。まず、学習者のニーズが高い（戸田 2008）にもかかわらず、音声教育は積極的に行われているとは言えないのが現状である。その理由として、「1.指導法への不安」、「2.教師の音声指導の知識不足」（谷口 1991、阿部他 2014）などがあげられている。これ以外に、東京方言を母方言としない日本人日本語教師から「無意識のうちに方言のアクセントが出てしまっている心配がある。」「方言が出てしまうため、共通語の音声指導に心的負担がある。」という声を聞く。管見の限り、日本語教師の出身地、母方言を調査した資料はないが、人口比率を考えれば、東京方言が母方言ではない教師のほうが圧倒的に多いと推測できる。つまり、大多数の教師が十分な音声教育を行わない（行えない）現状は、日本語教育界全体にとって、決して看過できない問題であると考えられる。

本研究では、特定の感情や意図を含む「発話機能に相応しい韻律」を伴う2つの方言を比較し、どのような共通点、相違点があるか明らかにすることを目的とする。方言資料に無アクセント⁴の村山方言を選んだ理由は、後述する。

この研究成果は、東京方言を母方言としない教師の一助となることを目指している。日本語の枠組みの中に、方言を問わず特定の発話機能に相応しい韻律の共通点があれば、共通語の発音に自信がない日本語教師も、母方言の韻律を生かして指導ができることが分かり、不安が軽減されるだろう。あるいは、母方言と共通語の間に相違点があった場合も、その相違を意識して指導に取り組むことができるだろう。

³ あえて特定の発話機能には相応しくない韻律を使って、話し手の隠れた真意を伝える「皮肉」や「嫌味」といった手法については、本研究では除外する。

⁴ 『国語学大辞典』（1980）では、「アクセントについて全国を大きく分類すると、東京語や京阪方言のように、拍単位ごとに複数の型をもち、語によってアクセントの区別がある方言と、そのような型の区別をもたない方言とに分かれる。前者を多型アクセント、後者を一型アクセントと言う」と書かれており、無アクセントについては、「一型アクセントは、宮崎県都城方言のように拍単位ごとに一つの型しかもちないものと、宮城県仙台方言などのように、音相の高低関係が一定しないものとに分けられる。両者を区別する場合には、前者を狭義の一型アクセント、後者を無アクセントと呼ぶことがある。」と書かれている。本稿ではこれを参考に、無アクセントを「音相の高低関係が一定ではなく、アクセントを持たないもの」と定める。

2. 研究方法

本稿は、ある特定の意図や感情を意識して発話した共通語、および村山方言の韻律を音響音声学的に分析し、共通点と相違点を明らかにしたものである。日本には地域方言が数多くあるが、その全ての方言を網羅的に取り上げ、共通語と比較するのは現実的ではない。ある方言を選定し比較するのが妥当である。今回、村山方言を選んだのには3つの理由がある。まずは、村山方言のアクセントを概観する。

村山方言は、山形県内にあるいくつかの方言のうちの南奥方言⁵系に属する。アクセントは無アクセント（平山 1983：60-61）である。無アクセントは、「語によって（アクセント）型の区別をすることがないもので、東日本では山形県内陸部のほか、宮城県南部・福島県全域・関東地方北東部などに広く分布」（山形県方言研究会 1970：722）し、話者は「アクセントの型意識を持たない」（山形県方言研究会 1970：727）。

このようなアクセントの特徴を持つ村山方言を資料にした1つ目の理由は、無アクセントだからである。以前、執筆者は日本語教師 30 名弱を対象に音声指導についてのアンケートを行ったことがある。その際、「母方言の影響で音声指導に自信がない」と答えた中で最も多かったのが、無アクセント方言話者（茨城、宮城、山形）であった。音声指導に自信がない教師は無アクセント方言話者のみではなかったが、初めに着手するのには無アクセントが最適だと考えた。

2つ目は、村山方言のリズム単位が東京方言と同じ「拍」だからである。本研究はイントネーション研究のため、リズムについては統制したほうが良いと考え、音節リズムの方言を除き選定した。

3つ目は、三世代世帯の割合が日本全国第一位だからである（厚生労働省 2015）。無アクセントの地域は、南奥羽から北関東にかけての地域と九州中央部に広い領域に広がっているが、首都圏に近い地域、および地方都市部は三世代世帯の例が少ない。詳しくはこの後に述べるが、本研究では祖父母と孫の日常会話を資料にしたため、日頃から祖父母と孫がコミュニケーションをとっていることが必須条件であった。無アクセントで、かつ三世代世帯が多い地域という条件から、村山方言を選んだ。

2.1. 資料

資料は、日常生活で大学生が祖父母と会話をしている場面、内容を想定して作成した。本研究は、高村（2020）の「大学場面における 13 種類の発話機能の韻律的特徴」を参考にしているため、それに倣って大学生を話者に選定した。大学生の会話相手に祖父母を選んだのは、聞き取り調査（1）から、現代の大学生が方言を使う相手は年配者が多いという結果が出たためである。以下、聞き取り調査（1）の詳細を述べる。

2.1.1. 方言で話す相手 — 聞き取り調査（1）

地方在住大学生の方言使用の実態を知ることがを目的に、2020年9月～10月、村山方

⁵ 南奥羽方言とも言う。

言を日常的に使用する大学生 A 氏（1999 年生まれ、調査当時 21 歳、女性、生育地は山形県村山市、生まれてから調査実施時まで祖父母と同居）に、メールによる調査、および半構造化インタビューを行った。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、インタビューはオンライン（zoom）で行った。メールによる調査では、①普段の生活で方言を使うことがあるか、②誰と話すときに方言を使うか、③どのような場面で方言を使うか、を中心に聞いた。後日、同じ質問について詳しくインタビューした。その結果、「普段、大学で友達と話すときは標準語で話す。地元の友達と地元で話すときも標準語で話す。方言をよく使うのは自分の祖父母と話すときで、自然と方言が出ている。いつも祖父母（80 代後半）の口調に合わせて話すようにしているからだと思う。祖父母と近い年齢のお年寄りと話するときも、相手が方言の場合は、自然と方言になっていると思う。また、祖父母と話ときは、場所、内容を問わず、常に方言で話している。」という回答が出た。

同様の回答は、2019 年 1 月に行った村山方言話者 B 氏（1970 年生まれ、調査当時 48 歳、女性、生育地は山形県西村山郡、生まれてから高校卒業まで居住）への聞き取り調査でも出ている。B 氏は若年層ではないが、B 氏の甥、姪、友人の子供が同年代の地元の友人らと話すのを見ていると、彼らは常に共通語で話しているという。

以上、山形在住の村山方言話者同士でも、若年層同士の会話では、方言は使わないことが示唆されたため、本研究では会話相手として祖父母を選んだ。

2.1.2. 日常場面で使用する発話機能の選定 – 聞き取り調査 (2)

次に、発話機能の選定について述べる。高村（2020）では、共通語での 20 種類の機能を意識した音声資料としているが、これは大学場面での会話を想定しているため、そのまま引用はできない。そこで、まず、家庭内における祖父母との会話の中で頻繁に使う発話機能を選定することを目的に、聞き取り調査 (2) を行った。2020 年 10 月、家庭内で祖父母と日常的に方言を使って話す A 氏（前述）と、C 氏、D 氏（ともに 1999 年生まれ、調査当時 21 歳、女性、生育地は、C 氏が愛知県一宮市、D 氏が愛知県豊田市である。ともに、生まれてから調査実施時まで祖父母と同居）の 3 名に半構造化インタビューを行った。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン（zoom）で行った。なお、聞き取り調査 (2) は、当初 3 人とも村山方言を母方言とする 20 代前半の女性に実施することを考えていたが、祖父母と同居し、かつ日常的に村山方言を使う人の中から、オンラインでのインタビューに応じてもらえる調査者を見つけることができなかつた⁶ため、愛知県在住の C 氏と D 氏に協力を依頼した。聞き取り調査 (2) の目的は、「家庭内で日常的にどのような発話機能が頻繁に使われるか」を調査することである。そのため、どの母方言であるかよりも、長年、祖父母と同居して良好な関係を築いている、という条件を満たすことのほうが重要である。C 氏と D 氏はこの条件を満たしており、協力者として適当である。

⁶ 新型コロナウイルス感染拡大の影響で、執筆者が現地に直接行けなかったことが一因である。

次に、調査の手順である。まず、村山方言話者である A 氏に調査を行った。高村 (2020) で示した 13 種類の発話機能と詳細場面 (表 2) を共有しながら、①祖父母との日常会話で想定できる発話機能、詳細場面はどれか、②想定できる発話機能の中で、不自然な場面のものはないか。ある場合はどのように変えると自然度が上がるか、を中心に質問した。

表 2 大学での会話における発話機能 13 種類と詳細な場面設定 (参考)

発話機能	詳細場面
1.挨拶 (目上)	朝、教師と出会う挨拶をする
2.食事の挨拶	友人の家で食事の前に挨拶をする
3.驚き	スポーツの動画を見せながら、驚きを伝える
4.許可求め	教師に授業の欠席の許可を求める
5.お悔み	身内に不幸のあった友人に、お悔やみの言葉を伝える
6.同情	失恋した友人に、気持ちは分かると伝える
7.指示	チームリーダーとして作業の指示をする
8.申し出	学園祭でイベントを企画する責任者になりたいと申し出る
9.呼びかけ	学生課で、少し離れたところにいる職員を呼ぶ
10.感謝	パーティー終了後、招待者に感謝を伝える
11.断り (行事)	学園祭のイベントへの参加を断る
12.謝罪 (目上)	提出の期限が遅れたことを教師に詫げる
13.謝罪 (友達)	誤って相手のシャーペンを壊したことを詫げる

高村 (2020 : 17-19) より一部改変。

その結果、「1.《挨拶》、2.《声掛け》、3.《依頼》、4.《協力求め》、5.《詫び》、6.《同情》、7.《感謝》、8.《許可求め》、9.《祝い》、10.《賞賛》の 10 種類は、祖母との会話が想定できる。」と回答された。

同様の調査を C 氏と D 氏にも行った。その結果、「10.《賞賛》⁷以外の 9 種類は場面が想定できる。」と回答された。以上の結果から、10 種類の発話機能を選定した (表 3)。

表 3 大学生と祖父母との会話における発話機能 10 種類と詳細な場面設定

発話機能	詳細場面
1.《挨拶》	久しぶりにおじいさん・おばあさんと会って挨拶をする。 (あなたは旅行に行っていた。久々に家に帰ってきて、出迎えてくれたおばあさんに話しかける場面)
2.《声掛け》	町でおじいさん・おばあさんを見つけて声を掛ける。 (肩が叩けるほどの距離で、あなたがおばあさんに声をかける場面)
3.《依頼》	自分の代わりにジュースや甘いものを買ってきてほしいと頼む。 (あなたがおばあさんにシュークリームを所望する場面)
4.《協力求め》	来客があった時に、応対してほしいと言う。 (玄関のチャイムが鳴ったが、あなたは手が離せないで、おばあさんに対応してほしいと協力を要請する場面)
5.《詫び》	約束をしていたのに、それに間に合わないで帰宅したことを詫げる。 (晩ご飯と一緒に食べる約束をしていたのに、断りなしに外で友達と食べてしまった。おばあさんに約束を破ったことを詫げる場面)

⁷ 祖母が芋煮を作ることはないが、他の料理でなら想像が容易であるという回答だった。

6. 《同情》	友人に不幸なことがあり元気がないため、同情の気持ちを伝える。 (おばあさんは、ご友人が腹痛で入院をしてしまったので心配している。その様子を見て、あなたがおばあさんに声をかけてあげる場面)
7. 《感謝》	出かける前に傘を忘れるなど教えてくれたので感謝を言う。 (出かける前に、あなたが傘を忘れそうになったが、おばあさんが傘を持って行ったほうが良いと教えてくれたので、感謝を言う場面)
8. 《許可求め》	おばあさんの部屋に荷物を一時的に置いておいてもらう許可をもらう。 (あなたが注文した荷物が予想以上に大きく、あなたの部屋に置いておくスペースがない。おばあさんの部屋に一時的に置かせてもらう許可を取る場面)
9. 《祝い》	おばあさんが習い事で良い結果を出したことを祝う。 (おばあさんが習っている稽古事(大正琴、カラオケなど)で良いことがあったので、それを祝う場面)
10. 《賞賛》	おばあさんが作ってくれた料理がとてもおいしかったので、褒める。 (おばあさんが晩御飯に作った芋煮がおいしいと伝える場面)

2.1.3. 共通語の会話文作成 ー聞き取り調査(3)

次に、発話機能を意識した会話文の作成について述べる。まず、共通語の会話文作成について記す。聞き取り調査(2)で出た10種類の発話機能、発話場面での自然な会話文を作成するために、執筆者⁸が30個(10種類の発話機能×3パターン)の会話文を作成した。1つの会話は2~3ターン⁹程度の短いものである。この会話文の自然さを担保するために、2名に聞き取り調査(3)を行った。両名とも、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン(zoom)で行った。

1人目はD氏(1999年生まれ、調査当時21歳、女性、生育地は神奈川県横浜市、その後愛知県一宮市に移転、祖父母との交流あり)で、2020年11月に行った。若年層であるD氏には、自分の祖母とする会話として自然であるか確認をした。2人目はE氏(1965年生まれ、調査当時56歳、女性、生育地は神奈川県川崎市、6歳の時に神奈川県横浜市に移転、35歳の時に東京都に移転)で、2020年11月に行った。首都圏出身のE氏には、共通語として不自然な言い回しはないかの確認を依頼した。その結果、特に留意されたものはなかった。以上の手順で完成させた会話文の一部を示す(表4)。

2.1.4. 村山方言の会話文作成 ー聞き取り調査(4)

次に、村山方言の会話文作成について記す。聞き取り調査(2)で出た10種類の発話機能、発話場面における自然な会話文を作成するために、聞き取り調査(4)を行った。2020年11月、A氏(聞き取り調査(1)の調査者と同一)とE氏(A氏の祖母、1936年生まれ、調査当時86歳、女性、生育地は山形県村山市、A氏とは、A氏が生まれてから調査時まで同居)の2名が同席し、インタビューを行った。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン(zoom)で行った。

2.1.2.で抽出した10種類の発話機能と場面、内容について詳しく説明した後、2.1.3.で作成した共通語での会話30個を機能ごとに順番に提示し、村山方言ではどのように言うか尋ねた。結果の一部を以下に示す(表5)。

⁸ 女性、生育地は神奈川県横浜市

⁹ ターンとは、会話分析や談話分析の分野の術語で、日本語では発話権と訳される。「話者交替が起こるまで1人の話者が連続して発話した区間」(榎本2008)を指す。

表 4 共通語における特定の発話機能を示す 3 パターンの表現 (一例)

発話機能	パターン a	パターン b	パターン c
2 《声掛け》	<p>A: あ、ばあちゃんじゃん。</p> <p>B: おお、(孫の名前)。ばあちゃん買い物に来たんだ。</p> <p>A: 私はアイス買いに来てたんだ。</p> <p>B: 私はマッチとろうそく買いに来たんだ。</p>	<p>A: ばあちゃん、何してんの？</p> <p>B: おお、(孫の名前)。ばあちゃん買い物に来たんだ。</p> <p>A: 私はアイス買いに来てたんだ。</p> <p>B: 私は、マッチとろうそく買いに来たんだ。</p>	<p>A: ばあちゃん、買い物？</p> <p>B: おお、(孫の名前)。ばあちゃん買い物に来たんだ。</p> <p>A: 私はアイス買いに来てたんだ。</p> <p>B: 私は、マッチとろうそく買いに来たんだ。</p>

表 5 村山方言における特定の発話機能を示す 3 パターンの表現 (一例)

発話機能	パターン a	パターン b	パターン c
2 《声掛け》	<p>A: おう、ばんちゃん。</p> <p>B: おう、(孫 A の名前)。ばんちゃん買い物さ来たんだ。</p> <p>A: おれアイス買いに来たっけんだ。</p> <p>B: おれはよ、マッチとろうそく買いに来たんだ。</p>	<p>A: ばんちゃん、何しっただの？</p> <p>B: おう、(孫 A の名前)。ばんちゃん買い物さ来たんだ。</p> <p>A: おれアイス買いに来たっけんだ。</p> <p>B: おれはよ、マッチとろうそく買いに来たんだ。</p>	<p>A: ばんちゃん、買い物だが？</p> <p>B: おう、(孫 A の名前)。ばんちゃん買い物さ来たんだ。</p> <p>A: おれアイス買いに来たっけんだ。</p> <p>B: おれはよ、マッチとろうそく買いに来たんだ。</p>

※太字は、ターゲットとする発話機能を含む発話。

2.1.5. 音声資料の作成

最後に、共通語、および村山方言の音声資料の作成について述べる。村山方言、共通語ともに、村山方言を母方言とする話者の音声を資料にした。

この論文は、最終的に日本語教育の現場での一助となることを目指している。それは、東京方言を母方言としない教師の中に、自分の話す共通語には村山方言の影響が表れており、そのため音声指導に積極的になれない人がいるからである。日本語学習者は、アナウンサーやナレーターの話す「完璧な共通語」を目指してはいない。コミュニケーションに支障がなく、かつマイナスに留意されない発話能力を身に付けることを目指している。現実社会では様々な訛りのある共通語で支障なくコミュニケーションができることを考えても、日本語教師が「完璧な共通語」を話せる必要はない。今回の資料は、東京方言を母方言としない話者のものであるが、首都圏で生育した話者から自然で聞きやすいと高く評価されたものである。この資料も、厳密に分析を行えば、東京方言話者の共通語とは多くの点で差異が認められるかもしれない。しかし、完璧な共通語での指導は必要ない¹⁰と考え、東京方言話者の共通語をモデルとはせず、村山方言話者の話した共通語を使った。

次に、収集方法について述べる。プロの声優 H 氏と声優 W 氏に録音を依頼した。自然さを追求するのであれば、一般人に依頼する方法も考えられる。しかし、予備調査の段階で、村山方言話者 A 氏に録音依頼をしたところ、自然な感じで会話をするのは困

¹⁰ むしろ、多文化共生社会の実現を考えれば、執筆者は、どんな場合でも「正しい共通語」をモデルとして扱うことに反対の立場である。

難であるとコメントをもらった経緯があるため、プロの声優の発話を資料とした。ただし、声優の発話を資料に使う場合、「大げさである」、「わざとらしい」などと評価をされる恐れがあると考え、2人には、出来る限り日常で使う自然な話し方を意識するようにと依頼した。

声優 H 氏には 2021 年 7 月、W 氏には 2021 年 9 月に、それぞれが所属する事務所を通して、録音の依頼をした。H 氏は 25 歳女性、W 氏は 30 代前半の女性で、2 人とも村山方言を母方言としており、20 代前半に上京するまでは祖父母と同居していた。今回の録音では、スタジオという狭い空間に複数の人がいるのは、新型コロナウイルス感染拡大の観点から好ましくないと考え、「自分の祖母と話していること」を念頭に、台本の中の祖父母のターン（B のパート）を想像しながら、自分のターン（A のパート）のみ録音するという方法で行った（上記表 4、5 参照）。

2.1.6. 音声資料の「自然さ」 一聴覚印象による評価

声優には自然な話し方を意識して発話するように依頼をしたが、さらに自然さを担保するために、2 名の各方言話者に聴覚印象による確認を依頼した。いずれも新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン（zoom）で行った。音声ファイルの再生は zoom の音声共有機能を用いた。

まず、共通語については、2022 年 2 月、首都圏で生育した E 氏（2.1.3.のプロフィール参照）が確認をした。執筆者が 1 ファイルずつ再生、停止をしながら、E 氏に①わざとらしくないか、自然な会話に聞こえるか、②不自然な箇所があった場合は具体的にどのように不自然だと感じるか、を尋ねた。再生の順番は、パターン 1 の発話機能 1→パターン 1 の発話機能 2→…というように、1 パターン全てが終わってから次のパターンを再生するという方法で行った。その結果、「特に不自然なものはなく、聞きやすい。」と評価された。

村山方言については、2022 年 2 月、村山方言話者 B 氏（2.1.1.のプロフィール参照）が確認をした。E 氏と同様の方法で行った。その結果、「共通語のテレビドラマも 100% 自然な会話かと言われるとそうではない。それと同じ印象である。わざとらしさは感じない。声の調子やアクセントから、自分と同じ地域で育った人の話し方だと分かる」と評価された。以上のことから、自然さに問題がない資料であると判断した。

2.2. 分析方法

音声を構成する要素は、分節音と韻律に大きく分けられる。佐藤（1995）は「母語話者が学習者の発話を評価する際、単音より韻律の影響力のほうが大きい」と述べている。本研究ではこれを援用し、韻律に絞って分析を行った。

では、イントネーション研究では、韻律のどこに注目して分析すべきだろうか。鈴木他（1992：39）によれば、「プロソディーの三要素」とは（1）基本周波数の時間的变化、（2）個々の音の継続時間、（3）振幅の時間的变化、強度の 3 つの事を指す。イントネーション研究の場合、基本周波数に着目することが多いが、三要素は互いに連動している。それを踏まえると、イントネーション研究であっても三要素全てを扱うのが好

ましいと考え、分析対象とした。

2.1.~2.1.6.の方法で収集した共通語、および村山方言での会話文 60 個の中から、聞き手が発話機能の判別をする際、最も影響があると考えられる 60 発話の音響分析を行った (表 6、7 太枠)。分析する韻律項目は、高村 (2020) に倣い、①一拍あたりの持続時間長、②Fo 最大値、③Fo 最小値、④Fo 平均値、⑤Fo 変動幅 (=②-③)、⑥音圧最大値、⑦音圧最小値、⑧音圧平均値、⑨音圧変動幅 (=⑥-⑦) の 9 項目の平均値を算出した。音響分析には、Praat (Version6.0.27) を用いた。

表 6 音響分析の対象となった発話 (共通語)

発話機能	パターン a	パターン b	パターン c
1 《挨拶》	ただいま。	帰ってきたよ。	ばあちゃん、いる？
2 《声掛け》	あ、ばあちゃんじゃん。	ばあちゃん、何してんの？	ばあちゃん、買い物？
3 《依頼》	そうだ、あれ、シュークリーム買ってきて。	ねえ、ついでにシュークリームも買ってきてよ。	シュークリームもいいかな。
4 《協力求め》	あ、誰か来たから出てくれる？	悪い、出てくれる？	ばあちゃん、出てもらっていいかな。
5 《詫び》	ごめんね、あの、今日友達と食べてきちゃった。	ばあちゃん、遅くなってごめんね。	連絡しなくてごめん、食べてきちゃった。
6 《同情》	まあ、きっと大丈夫だよ。どうにかなるよ。	ばあちゃん、元気出して。大丈夫だよ。	大丈夫。きっとよくなるよ。
7 《感謝》	あーそうなんだ。ありがとう。	はい、ありがとう。	分かった。ありがとうね。
8 《許可求め》	あの一ばあちゃんの部屋においていい？	悪いんだけど、荷物置かせてもらっても良い？	ごめん、ちよっとの間、置いてもいいかな。
9 《祝い》	へー、よかったねえ。	すごいね。	おめでとう。うれしいね。
10 《賞賛》	ばあちゃん、今日の芋煮おいしかったよ。	今日の芋煮、最高だった。	ばあちゃんの芋煮、うまかったわ。

表 7 音響分析の対象となった発話 (村山方言)

発話機能	パターン a	パターン b	パターン c
1 《挨拶》	ただいま。	帰っだよ。	ばんちゃん、いだ？
2 《声掛け》	おう、ばんちゃん。	ばんちゃん、何しっだの？	ばんちゃん、買い物だ？
3 《依頼》	んだ、あれ、シュークリーム買ってきてけろ。	んだ、ついでによ、シュークリームも買ってきてけね？	シュークリームもいいが？
4 《協力求め》	あ、誰か来たから出ててけろ。	われ、出でける？	ばんちゃん、出てけねが。
5 《詫び》	われなあ、あの、今日友達と食って来たつきゃー。	ばんちゃん、遅くなってわれなあ。	連絡すねでわれっけ、食べできだつきゃあ。
6 《同情》	まあ、大丈夫だべ、どうにかなっべ。	ばんちゃん、元気出してけろー。大丈夫だ。	大丈夫だあ、いぐなっべー。
7 《感謝》	あーんだか。ありがとう。	はい、ありがとう。	んだが、ありがとなあ
8 《許可求め》	あの、ばんちゃんの部屋さ、あそこさにおいてい？	われんだげんと、荷物置いでしいが？	われんだげんと、少しばかり置かせてけねが。
9 《祝い》	へー、いがったねえ。	すごいねー。	おめでとさまー。うれすいねえ。
10 《賞賛》	ばんちゃん、今日のいもこ汁、んまいつけよ。	今日のいもこ汁、ほんてんうめつけ。	ばんちゃんのいもこ汁、んめがったやあ。

3. 結果

3.1. 方言別・韻律的特徴の概観

共通語、および村山方言の韻律的特徴を概観するため、H氏とW氏の韻律要素の平均値を算出し、方言別に比較した(表8)。

まず、①一拍あたりの持続時間長は、共通語より村山方言のほうが長く、ゆっくり話すことを示している。次に、Foに関する4項目(②最大値、③最小値、④平均値、⑤変動幅)全ての数値が、村山方言は共通語に比して小さい。村山方言が無アクセントであることが影響している可能性がある。一方、音圧は、⑥最小値、⑦最大値、⑧平均値は村山方言のほうが高く、⑨変動幅は共通語のほうが高い。村山方言は共通語に比して、大きな声で、狭い音圧変動幅の範囲内で話すという特徴がある。

以上をまとめると、村山方言は共通語に比して(1)一拍あたりの持続時間長が長い、(2)Foが低く変動幅が狭い、(3)音圧が高く変動幅が狭い、という特徴があることが分かる。なお、参考までにH氏とW氏のそれぞれの分析結果を記しておく(表9)。

表8 村山方言と共通語の平均値の比較(全体)

		村山	共通
持続時間長(ms)	平均	<u>2578</u>	2295
	合計	<u>154668</u>	137681
	①一拍	<u>221.5</u>	184.6
速さ(拍/ms)	発話速度	4.98	<u>5.52</u>
Fo(dB)	②最大	366.8	<u>410.8</u>
	③最小	177.2	<u>188.4</u>
	④平均	264.2	<u>276.5</u>
	⑤変動幅	189.6	<u>222.4</u>
音圧(Hz)	⑥最大	<u>72.9</u>	71.8
	⑦最小	<u>36.1</u>	33.8
	⑧平均	<u>66.0</u>	64.6
	⑨変動幅	36.9	<u>38.1</u>

※両者を比較して数値が大きい方に下線を付す。

表9 H氏、W氏の韻律の個人的特徴(参考)

		村山		共通	
		H氏	W氏	H氏	W氏
持続時間長	平均(ms)	<u>3176</u>	1980	<u>2589</u>	2001
	合計(ms)	95273	59395	77662	60019
	①一拍平均(ms)	<u>272</u>	171	<u>209</u>	160
速さ	発話速度(拍/ms)	3.8	<u>6.1</u>	4.8	<u>6.2</u>
Fo	②最大(Hz)	338	<u>396</u>	366	<u>455</u>
	③最小(Hz)	168	<u>186</u>	163	<u>214</u>
	④平均(Hz)	244	<u>284</u>	240	<u>313</u>
	⑤幅(Hz)	170	<u>210</u>	203	<u>242</u>
	音圧	⑥最大(dB)	68	<u>78</u>	67
⑦最小(dB)		<u>38</u>	35	<u>36</u>	31
⑧平均(dB)		61	<u>71</u>	59	<u>70</u>
⑨幅(dB)		30	<u>43</u>	31	<u>45</u>

※H氏とW氏を比較し、数値が大きい方に下線を付す。

共通語、村山方言ともに、持続時間長平均、持続時間長合計、①一拍平均、発話速度から、H氏はW氏に比して、ゆっくり話すことが分かる。Foは、H氏はW氏よりも②最大値、③最小値、④平均値が低く、⑤変動幅が狭い。音圧は、H氏はW氏よりも⑥最小値が大きく、⑦最大値、⑧平均値が小さく、⑨変動幅は狭い。つまり、H氏はW氏に比して、比較的小さめの声で、狭い音圧変動幅の範囲内で話している。そして、これらの特徴は方言によって変わるものではないということが分かる。

3.2. 発話機能別・韻律的特徴の概観

3.1.では方言別に韻律的特徴を概観したが、これは発話機能別に分析した場合にも見られる特徴なのか。ここでは、発話機能別に分析した結果を述べる（表10）。

まず、10種類の発話機能の全てにおいて、①一拍平均時間、⑥音圧最大値¹¹、⑧音圧平均値の3項目は、共通語に比して村山方言が大きい。②Fo最大値¹²、③Fo最小値¹³、④Fo平均値¹⁴、⑤Fo変動幅¹⁵、⑦音圧最小値¹⁶、⑨音圧変動幅¹⁷の6項目は、いくつかの機能で異なる特徴が見られたが、差が僅かであるため（注11～17）聴覚印象に影響はない範囲である考える。以上のことから、発話機能の種類によらず、村山方言は共通語に比して（1）一拍あたりの持続時間長が長い、（2）Foが低く変動幅が狭い、（3）音圧が高く変動幅が狭い、という特徴があり、これは、3.1.の方言別の概観と一致している。つまり、発話機能別に分析をしても結果が同じであることを示す。

表10 村山方言と共通語の一拍平均、Fo、音圧の平均値の比較（発話機能別）

	①一拍平均				②Fo最大				③Fo最小			
	村山		共通		村山		共通		村山		共通	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
1《挨拶》	181	28.7	177	32.1	360	33.0	393	66.0	224	24.1	224	36.1
2《声掛け》	174	48.8	172	40.1	396	66.2	435	75.9	179	20.2	177	19.6
3《依頼》	170	46.5	145	19.2	395	52.5	440	32.1	165	12.2	175	236
4《協力求め》	268	120.3	191	41.9	366	57.3	404	55.6	169	15.3	182	34.9
5《詫び》	212	74.4	203	50.7	340	66.7	388	109.2	173	23.6	184	38.4
6《同情》	248	77.9	201	40.9	337	26.1	414	66.2	160	26.8	169	35.2
7《感謝》	284	74.8	187	26.7	334	17.6	383	58.5	183	22.9	188	47.9
8《許可求め》	225	57.7	216	62.3	379	54.8	371	66.4	175	16.7	172	24.3
9《祝い》	290	105.1	214	49.7	377	53.2	459	61.5	167	34.6	224	58
10《賞賛》	164	31.9	140	26.9	386	42.5	422	50.7	178	12.7	191	35.3

¹¹ ⑥音圧最大値：「6.同情」、および「7.感謝」は、村山方言と共通語は同値である。
¹² ②Fo最大値：8.《許可求め》は村山方言のほうが高いが、その差は8Hzと僅かである。
¹³ ③Fo最小値：1.《挨拶》は共通語と村山方言と同値である。2.《声掛け》、8.《許可求め》は村山方言のほうが高いが、その差はそれぞれ2Hz、3Hzと僅かである。
¹⁴ ④Fo平均値：2.《声掛け》、8.《許可求め》は村山方言のほうが高いが、その差はそれぞれ6Hz、5Hzと僅かである。
¹⁵ ⑤Fo変動幅：8.《許可求め》は村山方言のほうが高いが、その差は4Hzと僅かである。
¹⁶ ⑦音圧最小値：9.《祝い》は共通語と村山方言は同値である。
¹⁷ ⑨音圧幅：9.《祝い》は村山方言のほうが大きい、その差は1dBと僅かである。10.《賞賛》は共通語と村山方言は同値である。

	④Fo 平均				⑤Fo 幅				⑥音圧最大			
	村山		共通		村山		共通		村山		共通	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
1 《挨拶》	285	33.8	<u>298</u>	42.6	136	32.6	<u>169</u>	78.8	<u>74</u>	6.2	71	6.0
2 《声掛け》	<u>284</u>	30.8	278	29.8	217	61.9	<u>259</u>	59.6	<u>74</u>	8.5	73	7.2
3 《依頼》	274	16.0	<u>280</u>	35.4	230	44.0	<u>265</u>	16.4	<u>74</u>	7.6	73	6.2
4 《協力求め》	259	24.9	<u>267</u>	44.7	197	53.0	<u>222</u>	43.9	<u>74</u>	8.0	71	6.8
5 《詫び》	247	22.8	<u>262</u>	52.1	167	67.3	<u>204</u>	93.3	<u>71</u>	8.2	69	9.3
6 《同情》	245	28.9	<u>265</u>	41.2	176	38.8	<u>245</u>	40.3	71	7.6	71	8.1
7 《感謝》	263	21.1	<u>288</u>	31.9	151	14.2	<u>195</u>	66.3	73	6.7	73	6.8
8 《許可求め》	<u>249</u>	23.7	244	41	<u>204</u>	46.8	200	61.0	<u>73</u>	7.6	71	7.5
9 《祝い》	273	27.8	<u>319</u>	58.1	210	67.8	<u>235</u>	53.5	<u>74</u>	6.9	74	7.9
10 《賞賛》	265	24.3	<u>266</u>	44.1	209	51.6	<u>231</u>	41.6	<u>73</u>	7.8	72	7.8

	⑦音圧最小				⑧音圧平均				⑨音圧幅			
	村山		共通		村山		共通		村山		共通	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
1 《挨拶》	<u>44</u>	13.2	41	12.4	<u>69</u>	7.0	68	6.6	29	10.7	<u>30</u>	9.4
2 《声掛け》	<u>36</u>	7.6	34	4.4	<u>67</u>	7.9	65	7.7	38	9.5	<u>40</u>	7.9
3 《依頼》	<u>35</u>	5.4	32	5.9	<u>66</u>	6.5	65	6.3	39	7.5	<u>41</u>	8.4
4 《協力求め》	<u>37</u>	6.5	32	6.8	<u>66</u>	8.4	64	7.3	37	5.7	<u>39</u>	8.6
5 《詫び》	<u>35</u>	4.9	33	4.6	<u>64</u>	7.8	62	9	36	7.3	<u>36</u>	10.0
6 《同情》	<u>34</u>	5.5	32	4	<u>64</u>	7.7	63	7.6	36	8.6	<u>38</u>	9.3
7 《感謝》	<u>35</u>	8.8	33	2.8	<u>67</u>	6.4	66	6.7	38	9.9	<u>40</u>	6.5
8 《許可求め》	<u>34</u>	4.9	31	5.3	<u>64</u>	7.7	63	8.5	39	7.9	<u>40</u>	9.7
9 《祝い》	36	5.0	<u>36</u>	4.1	<u>68</u>	7.9	67	7.1	<u>39</u>	7.7	38	7.0
10 《賞賛》	<u>35</u>	5.4	34	5.9	<u>67</u>	7.1	66	7.5	<u>38</u>	8.5	38	11.0

※村山方言と共通語を比べ、大きい方の値に下線を付す。

3.3. 発話機能別・村山方言話者の話す共通語に見られる村山方言の影響

3.1.と 3.2.の結果から、発話機能の種類を問わず「共通語で話すときは、村山方言よりも短く、高く、小さく話す」ことを意識すればよいということになる。

ただし、3.1.と 3.2.では、H氏とW氏の持つ個人的特徴を排除せず分析をしている。例えば、H氏、W氏が発話したある発話機能のFo平均値が300Hzで同値であったとして、全体的に低い声で話すH氏と高い声で話すW氏（表9）とでは、値の持つ意味が異なる。低い声で話すH氏にとっては「他の発話機能より高い声」になるが、高い声で話すW氏にとっては「他の機能より低い声」で話すことになる可能性があるため、単純に比較できない。

そこで、3.3.では、個人的特徴を排除した上で各発話機能の特徴を再考する。その上で、村山方言の韻律的特徴を有したまま音声指導可能な発話機能はどれかを探る。

3.3.1. 研究方法

60発話について、韻律要素5項目（①一拍あたりの持続時間長、④Fo平均値、⑤Fo変動幅、⑧音圧平均値、⑨音圧変動幅）のz値を求めた。分析項目について、3.2.までは①～⑨の項目を分析していたが、音声指導を主眼に置くと②、③、⑥、⑦の分析は省略可能と考える。それは、Fo最小値やFo最大値のみを調整、指導することは極めて難しく、Fo平均値を調整、指導するのが最も適当で教育的効果が高いと考えたからであ

る。そのため、②Fo 最大値と③Fo 最小値は、⑤Fo 変動幅の算出のために、⑥音圧最大値と⑦音圧最小値は、⑨音圧変動幅の算出のために使った。

3.3.2. 発話機能別・韻律的特徴 一個人的特徴を排除した分析結果

以下に z 値を示す (表 11)。

表 11 村山方言と共通語の一拍平均、Fo、音圧の z 値平均の比較 (発話機能別)

		①1 拍平均				④Fo 平均				⑤Fo 幅			
		村山		共通		村山		共通		村山		共通	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
1	《挨拶》	-0.5	0.5	-0.1	0.7	0.9	1.1	0.7	0.7	-1.0	0.4	-0.9	1.2
2	《声掛け》	-0.7	0.4	-0.3	0.6	0.9	0.7	0.1	0.7	0.3	0.9	0.7	0.8
3	《依頼》	-0.8	0.5	-0.9	0.5	0.4	0.4	0.1	0.7	0.6	0.6	0.7	0.2
4	《協力求め》	0.8	1.8	0.1	0.5	-0.3	0.7	-0.3	0.4	0.0	0.7	-0.0	0.6
5	《詫び》	-0.2	0.6	0.4	0.8	-0.9	0.6	-0.5	0.6	-0.5	0.9	-0.1	1.2
6	《同情》	0.4	0.4	0.4	0.8	-1.0	0.8	-0.3	1.6	-0.3	0.5	0.3	0.7
7	《感謝》	1.0	0.4	0.1	0.4	-0.1	1.0	0.4	0.5	-0.7	0.4	-0.5	1.2
8	《許可求め》	0.1	0.6	0.8	1.4	-0.8	0.9	-1.1	0.4	0.9	1.1	-0.3	0.9
9	《祝い》	1.0	0.8	0.6	0.6	0.4	0.8	1.3	0.6	0.2	1.1	0.0	1.0
10	《賞賛》	-0.9	0.1	-1.1	0.4	-0.0	0.4	-0.4	0.6	0.2	1.0	0.1	0.6

		⑧強さ平均				⑨強さ幅			
		村山		共通		村山		共通	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
1	《挨拶》	0.5	1.2	0.4	1.1	-1.2	1.6	-1.2	1.1
2	《声掛け》	0.3	0.9	0.2	0.7	0.2	1.3	0.3	0.8
3	《依頼》	-0.3	0.8	0.0	0.4	0.2	0.5	0.4	0.6
4	《協力求め》	-0.2	0.9	-0.1	0.7	0.0	0.8	0.2	0.7
5	《詫び》	-0.6	0.6	-0.5	0.8	-0.2	0.5	-0.3	0.6
6	《同情》	-0.7	0.7	-0.6	1.7	-0.2	0.6	0.1	1.7
7	《感謝》	0.0	0.6	0.3	0.6	0.1	0.8	0.4	0.2
8	《許可求め》	-0.5	0.5	-0.3	0.8	0.2	0.5	0.4	0.6
9	《祝い》	1.0	1.4	0.4	0.7	0.2	0.5	-0.2	1.0
10	《賞賛》	0.2	0.7	0.2	0.8	0.1	0.5	-0.0	0.9

まず、3.1.~3.2.でみた「方言別／機能別の韻律的特徴の概観」¹⁸と比較した結果について触れておく。z 値の平均値を基準に発話機能を 2 分類し、平均値より小さいものには「短」「低」「狭」、大きいものには「長」「高」「広」と記し、表にまとめた (表 12)。太線で囲んだ箇所は、3.1.~3.2.でみた方言別／機能別の韻律的特徴の概観とは異なる機能である。5 つの韻律要素全てにおいて、半数近い発話機能が 3.1.~3.2.の結果とは異なる様相を呈する。だが、3.1.~3.2.の結果とは異なっても、例えば「1.《挨拶》の発話機能は、共通語でも村山方言でも (1) 一拍あたりの持続時間長を短く話す」という共通の特徴があれば、共通語での音声指導の際に村山方言がマイナスに影響することはない。村山方言で話すときと同じように、持続時間長を短く話せばよ

¹⁸ 村山方言は共通語に比して、(1) 一拍あたりの持続時間長が長い、(2) Fo が低く変動幅が狭い、(3) 音圧が高く変動幅が狭い。

いわけである。

表 12 村山方言の韻律的特徴（概観）と個人的特徴を排除した場合の特徴との比較

①一拍平均			④高さ平均		⑤高さ幅			⑧強さ平均			⑨強さ幅			
4	協力求め	長	1	挨拶	高	1	挨拶	狭	1	挨拶	大	1	挨拶	狭
6	同情	長	2	声掛け	高	5	詫び	狭	2	声掛け	大	5	詫び	狭
7	感謝	長	3	依頼	高	6	同情	狭	7	感謝	大	6	同情	狭
8	許可求め	長	9	祝い	高	7	感謝	狭	9	祝い	大	2	声掛け	広
9	祝い	長	4	協力求め	低	4	協力求め	広	10	賞賛	大	3	依頼	広
1	挨拶	短	5	詫び	低	2	声掛け	広	3	依頼	小	4	協力求め	広
2	声掛け	短	6	同情	低	3	依頼	広	4	協力求め	小	7	感謝	広
3	依頼	短	7	感謝	低	8	許可求め	広	5	詫び	小	8	許可求め	広
5	詫び	短	8	許可求め	低	9	祝い	広	6	同情	小	9	祝い	広
10	賞賛	短	10	賞賛	低	10	賞賛	広	8	許可求め	小	10	賞賛	広

※太線囲み：3.1~3.2 で述べた村山方言における韻律的特徴（概観）とは異なる発話機能。

次に、発話者の個人的特徴を排除した資料を分析したときに、共通語と村山方言の間に共通点、相違点がある発話機能はどれかを探った。共通の特徴をもつ発話機能については、村山方言話者の教師が留意せずに共通語を話せる可能性が高い。異なる特徴をもつ発話機能については、村山方言話者の教師にとって注意を要する可能性が高い。例えば、《詫び》の①一拍持続時間を見ると、村山方言では z 値が平均値以下だが、共通語では平均値以上である。以下に比較の結果をまとめる（表 13）。

表 13 共通語と村山方言で異なる韻律的特徴をもつ発話機能

		①1 拍平均		④Fo 平均		⑤Fo 幅		⑧音圧平均		⑨音圧幅	
		村山	共通	村山	共通	村山	共通	村山	共通	村山	共通
1	《挨拶》	-0.5	-0.1	0.9	0.7	-1.0	-0.9	0.5	0.4	-1.2	-1.2
2	《声掛け》	-0.7	-0.3	0.9	0.1	0.3	0.7	0.3	0.2	0.2	0.3
3	《依頼》	-0.8	-0.9	0.4	0.1	0.6	0.7	-0.3	0.0	0.2	0.4
4	《協力求め》	0.8	0.1	-0.3	-0.3	0.0	-0.0	-0.2	-0.1	0.0	0.2
5	《詫び》	-0.2	0.4	-0.9	-0.5	-0.5	-0.1	-0.6	-0.5	-0.2	-0.3
6	《同情》	0.4	0.4	-1.0	-0.3	-0.3	0.3	-0.7	-0.6	-0.2	0.1
7	《感謝》	1.0	0.1	-0.1	0.4	-0.7	-0.5	0.0	0.3	0.1	0.4
8	《許可求め》	0.1	0.8	-0.8	-1.1	0.9	-0.3	-0.5	-0.3	0.2	0.4
9	《祝い》	1.0	0.6	0.4	1.3	0.2	0.0	1.0	0.4	0.2	-0.2
10	《賞賛》	-0.9	-1.1	-0.0	-0.4	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	-0.0

※波線：村山方言と共通語と 5 つの韻律的特徴が全て同じ特徴である発話機能。

※太線囲み：村山方言と共通語と韻律的特徴が異なることを示す。

まず、1. 《挨拶》、2. 《声掛け》、4. 《協力求め》の 3 種類の発話機能については、①一拍あたりの持続時間長、④Fo 平均値、⑤Fo 変動幅、⑧音圧平均値、⑨音圧変動幅の 5 項目全ての項目において、共通語、村山方言とも同じ特徴を有する。具体的には、

1. 《挨拶》は、①一拍平均が短い、④Fo 平均値が高い、⑤Fo 変動幅が狭い、⑧音圧

平均値が大きい、⑨音圧変動幅が狭い。

2. 《声かけ》は、①一拍平均が短い、④Fo 平均値が高い、⑤Fo 変動幅が広い、⑧音圧平均値が大きい、⑨音圧変動幅が広い。

4. 《協力求め》は、①一拍平均が長い、④Fo 平均値が低い、⑤Fo 変動幅は平均的、⑧音圧平均値が小さい、⑨音圧変動幅が広い。

という特徴がある。前述したとおり指導に焦点をあてれば、この3種類の発話機能は方言間で差がないため、村山方言話者は留意せずに指導可能であると推測できる。

反対に、指導の際に注意を要するのは、それ以外の7種類の発話機能である。共通語と村山方言の間には以下に示した点において異なる韻律的特徴がある。

- 3. 《依頼》の⑧音圧平均は、村山方言より共通語のほうが大きい。
- 5. 《詫び》の①一拍平均は、村山方言より共通語のほうが長い。
- 6. 《同情》の⑤Fo 変動幅と⑨音圧変動幅は、村山方言により共通語のほうが大きい。
- 7. 《感謝》の④Fo 平均は、村山方言より共通語のほうが高い。
- 8. 《許可求め》の⑤Fo 変動幅は、村山方言より共通語のほうが大きい。
- 9. 《祝い》の⑨音圧変動幅は、村山方言より共通語のほうが大きい。
- 10. 《賞賛》の⑨音圧変動幅は、村山方言より共通語のほうが大きい。

では、7種類の発話機能が共通語と異なる理由は何か。韻律要素ごとに見ていく。まず、持続時間長について述べる。①一拍あたりの持続時間長を見ると、村山方言の5. 《詫び》は共通語に比して短い。2名による3パターンの数値を比べたところ、話者やパターンに関わらず短い(図1)。3.1.~3.2.で述べた方言別の韻律的特徴の概観とも異なっている。それは、相手に申し訳ないという意図を示すとき、ネガティブな印象を与えてはいけない。しかし、一拍の持続時間長が長いと、時に冗長で言い訳がましく聞こえてしまう。それよりは、潔い印象を与えたいと考えているのかもしれない。



図1 「5.詫び」①一拍平均 (※村山方言のほうが共通語よりも短い)

次に、Foについて述べる。④Fo 平均値を見ると、村山方言の7.《感謝》は共通語より低い。また、⑤Fo 変動幅を見ると、村山方言の6.《同情》は共通語より狭い。これ

らは、3.1.~3.2.で述べた方言別の韻律的特徴の概観と一致しており、村山方言が無アクセントであることが影響している可能性がある。だが、8.《許可求め》については、方言別の韻律的特徴の概観で述べた(2)「Foが低く変動幅が狭い」とは異なる。この発話機能以外にも、Fo変動幅が共通語より大きい機能はある¹⁹が、8.《許可求め》だけ著しく変動幅が広い²⁰。そこで、8.《許可求め》の音声を確認したところ、パターンb、cに比べ、特にパターンaの文末に著しいFoの上昇が見られることが分かった(図2)。著しい変動幅の差は、このパターンaの数値が影響を及ぼしたものとする。

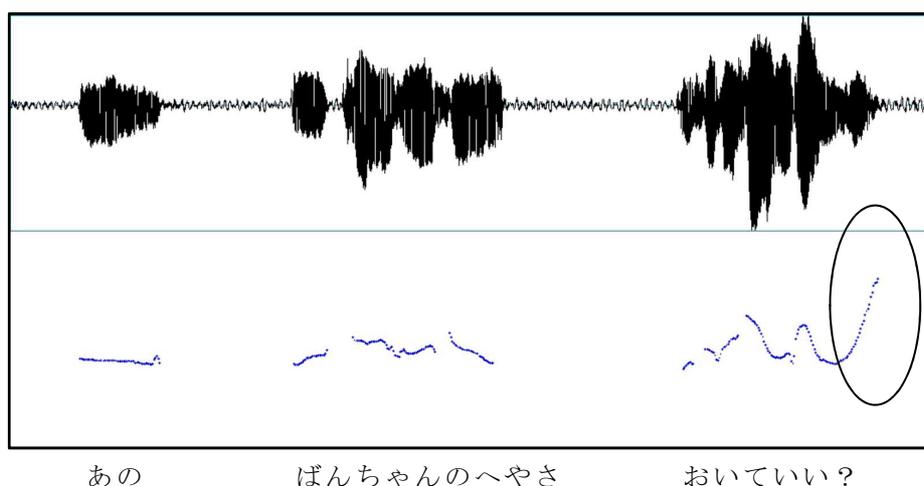


図2 H氏の8.《許可》パターンaのFo曲線

最後に、音圧について述べる。⑧音圧平均値を見ると、村山方言の3.《依頼》は共通語より低い。また、⑨音圧変動幅を見ると、村山方言の9.《祝い》、10.《賞賛》は共通語より広い。これは、方言別の韻律的特徴の概観の(3)音圧が高く変動幅が狭い、という特徴とは異なる。

まず、3.《依頼》は、相手に何かをお願いすることではあるが、同時に相手に負担をかけることであるため、申し訳ない気持ちが含まれることがある。4.《協力求め》、5.《詫び》、6.《同情》、7.《感謝》、8.《許可求め》を見ると、これら5種類は平均値以上/以下の分類では同じカテゴリーにあるが、⑧音圧平均値が共通語よりも低い。この5種類にも相手への気遣いが含まれると考えれば、村山方言では、相手を気遣うときには小さめの声で話すのが相応しいという可能性がある。

反対に、9.《祝い》と10.《賞賛》は、自分がうれしい気持ちであることを伝える。共通語の場合、Fo平均値やFo変動幅を使って示すが、村山方言では⑨音圧変動幅を共通語よりもより使って示す可能性がある。なお、⑨音圧変動幅の6.《同情》は、3.1.~3.2.で述べた方言別の韻律的特徴の概観と一致しているため、村山方言話者が留意を要するものではないと考える。

¹⁹ 4.《協力求め》、9.《祝い》、10.《賞賛》の3種類の発話機能を指す。

²⁰ z値=村山:0.9、共通:-0.3(表13参照)

以上、村山方言を母方言とする教師は、上記 7 種類のうち 3.1.~3.2.方言別の韻律的特徴の概観とも異なる 5 種類の発話機能（3.《依頼》の⑧音圧平均、5.《詫び》の①一拍平均、8.《許可求め》の⑤Fo 変動幅、9.《祝い》の⑨音圧変動幅、10.《賞賛》の⑨音圧変動幅）の相違点に留意して音声指導を行うと良いと考える。

4. まとめ

最後に、これまでの結果を簡単にまとめておく。まず、3.1.の結果から、村山方言は共通語に比して、（1）一拍あたりの持続時間長が長い、（2）Fo が低く変動幅が狭い、（3）音圧が大きく変動幅が狭い、という方言別の韻律的特徴があることが分かった。これは、3.2.で発話機能別に分析をしても同じ結果であった。しかし、3.3.で個人的特徴を排除した上で発話機能別に分析した場合は、新たな特徴が見られた。1.《挨拶》、2.《声掛け》、4.《協力求め》の 3 種類は、共通語、村山方言ともに、共通の韻律的特徴で発話するため、村山方言話者にとって共通語での指導がしやすい。一方で、3.《依頼》の⑧音圧平均、5.《詫び》の①一拍平均、8.《許可求め》の⑤Fo 変動幅、9.《祝い》の⑨音圧変動幅、10.《賞賛》の⑨音圧変動幅の 5 種類は、共通語と村山方言とで異なる特徴を持つ。それは、共通語の社会と村山方言の社会とでは、発話機能に相応しいと認められる韻律に差があることを示唆している。エリクソン・昇地（2010）が述べているように、発話機能に相応しい韻律は、基本的には言語ごとに決まると考えるが、国家ごとに決まる部分もあると考える。なぜなら、同一の政治、教育、経済、そしてメディアに触れている人間の規範は似ることが推測できるからである。しかし、それは「土地」の特徴が完全に消えることを意味しているわけではない。言語間、国家間ほどの相違はなくとも、方言間の相違はあるだろう。つまり、発話機能に相応しいと認められている韻律が方言によって異なるというのは大いにあり得ることだ。

ただし、日本語教育における指導を考えれば、この相違はさほど意識しなくても良いのではないか。それよりも、音声教育が停滞している現状を打破することのほうが喫緊の課題である。東京方言を母方言としない教師が、方言間に横たわる相違点に囚われ、音声指導が思うようにできなくなってしまうのであれば、共通語との相違点は気にしすぎず、多様なイントネーションで「日本語」の発音を教える社会になったほうが健全である。したがって、今回示した特徴（特に相違点）は、音声指導をしていて、自信がなくなったときに目にする程度に留めるのが良いだろう。何よりも、教師が自信をもって音声教育を行える環境を整えるのが最優先事項であると考え。

今後の課題について述べる。1 つ目は、資料の数、特にパターンを増やすことである。3.3.2.の 8.《許可求め》で、パターン a のみ文末に著しい Fo の上昇が見られた。これはパターン a のみ、別機能と考えたほうが良い可能性がある。したがって、パターンを増やしたうえで、機能の分類を精査したい。

2 つ目は、イントネーションをもう少し細かく区切って分析することである。今回は、発話全体を俯瞰的に捉えて分析したが、例えば、文末のみに注目して共通語と村山方言

を比較した場合、新たな知見を得る可能性がある。

3 つ目は、他の方言で同様の調査を行うことである。今回は無アクセントの方言を比較対象としたが、アクセント型を持つ方言で、東京方言とよく比較される関西の方言でも同様の結果が出るのかを調べたい。

注

* 本研究は「日本語教師の母方言を生かした「機能表現指導の指標」(令和 2 年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号 20K00737 研究代表者:高村めぐみ)による助成を受けています。

参考文献

- Boersma, Paul and David Weenink (2017). Praat: doing phonetics by computer. Version 6.0.27. www.praat.org.
- 阿部新・須藤淳・嵐陽子 (2014)「日本語教育における音声教育について日本語教師が考えていること—音声教育の目標・具体的内容・困難点・改善希望の分析から—」『2014 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、pp.229-234. 日本語教育学会
- 榎本美香 (2008)「会話・対話・談話研究のための分析単位—ターン構成単位 (TCU) —」『人工知能学会誌』23 巻 2 号、pp.265-270. 人工知能学会
- 天沼寧・大坪一夫・水谷修 (1978)『日本語音声学』、くろしお出版.
- エリクソン, ドナ・昇地崇明 (2010)「パラ言語情報にみられる異文化間の知覚の相違」『コミュニケーション、どうする? どうなる?』 pp.138-153. ひつじ書房
- 国語学会 (1980)『国語学大辞典』東京堂出版
- 国立国語研究所 (1960)『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』秀英出版
- 国立国語研究所 (1987)『談話行動の諸相』三省堂
- 定延利之 (2013)「日本語のアクセントとイントネーションの競合的關係」『日本語音声コミュニケーション』1 号、pp.1-33. 日本語音声コミュニケーション研究会
- 佐藤友則(1995)「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』5、pp.139-154. 国際交流基金日本語国際センター
- 鈴木淳也・佐川雄二・田中敏光・杉江昇・下山博(2005)「聞きやすい音声におけるポーズ長と話速の關係の分析」『名城大学総合研究所総合学術研究論文集』4、pp.27-36. 名城大学総合研究所
- 高村めぐみ (2018)「機能を示す韻律に対する聴覚印象—日本語母語話者と中国人学習者の比較—」『比較文化研究』130 号、pp.129-139. 日本比較文化学会
- 高村めぐみ (2020)「「機能」に相応しいと評価される韻律の特徴—日本語学習者にとって必要な音声指導を目指して—」『実験音声学・言語学研究』12 号、pp.15-38. 日本実験言語学会
- 谷口聡人 (1991)「音声教育の現状と問題点—アンケート調査の結果について—」『日本語音声の韻律的特徴と日本語教育シンポジウム報告 重点領域研究・日本語音声 D1 班・平成 3 年度報告書』、pp.20-25.
- 戸田貴子編著 (2008)『日本語教育と音声』くろしお出版

厚生労働省（2015）「平成 27 年版厚生労働白書—人口減少社会を考える—」
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/backdata/01-01-03-089.html>（2022 年 2 月 24
日閲覧）

平山輝男（1983）『全国方言辞典—県別方言の特色』1、

山岡正紀（2006）「発話機能論の原理—命令・服従を例として」『日本語日本文学』 16、pp.1-17.
創価大学日本語日本文学会

山形県方言研究会（1970）『山形県方言辞典』

執筆者紹介

氏名：高村めぐみ

所属：愛知大学

Email：takamura@aichi-u.ac.jp